

## 養護教諭養成課程に在籍する学生の情報モラル教育に関する意識調査

松本 禎明・伊舎堂 楊子

九州女子短期大学専攻科子ども健康学専攻 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2015年11月12日受付、2015年12月17日受理)

### 要 旨

昨今の電気通信技術の発達には目を見張るものがある。5年も経てば通信情報機器が大きく様変わりしていることを目の当たりにする。携帯電話は年々小型軽量化が進み、方式はアナログからデジタルへと変わり通信上の秘匿性も向上した。それでもその利用は通話が当初主流であったが、簡単な短い文章を交わすことが可能となり、携帯用のWebサイトへの接続など歩く情報機器へと発展していった。ところが、2010年頃からタブレット型通信機器、スマートフォンが登場することになり、パソコン機能を備えた持ち歩く通信機器の時代に入り、瞬く間に普及したのである。このことが通信を場所や時間を選ばない形となり、かつて経験したこのない程の便利な通信機器を手にしてしまった大学生のライフスタイルにも大きな影響を与えている。しかしながら、便利さの裏返しで使い過ぎによる生活のリズムへの悪影響や周囲の人への迷惑など新たな問題を抱えることになった。

そこで、本研究では、スマートフォン全盛期の渦中において、将来子ども達の健康教育や保健指導に携わる可能性の高い大学1年生に2年度(2014年度、2015年度)にわたりその利用に関する意識調査を実施した。その結果、両年度共にスマートフォン所持率は100%に達していることが分かった。その活用は、特定の相手との文字通信が通話を抜いてトップであった。生活のリズムへの影響についてはそれを感じているという回答が相当数あった。周囲への配慮としては、大学での授業座席について、2014年度自由席が2015年度指定席になったことが影響してか、特に迷惑がかからないようにしているという回答が2015年度は増えた。街中での懸念は、配慮をすべき公衆の面前や危険を伴う場面での使用に憂慮を示していた。子ども達への情報モラル教育の開始世代については、2014年度は小中高等学校で半数前後であったが、2015年度は中、高等学校を回答する割合が多かった。その教育を誰が行えば良いのかは、幼稚園(保育所)では幼稚園教諭(保育士)、小中高等学校では生徒指導教諭と外部の情報教育専門家、大学では情報教育専門教員と外部の情報教育専門家という回答が多かった。

以上のことから、健康教育や保健指導に関わる可能性の高い学生は、自らの置かれている境遇からその利便性、所持する必要性、周囲への配慮及び健康への影響などを意識し、適切な情報モラル教育を行う必要性を強く感じていることが分かった。

## I. 緒言

かつての東京オリンピックが開催された年頃からテレビが普及し、その後カラー化され1970年代には1家に1台は当たり前の時代となった。1980年代には、留守番電話やポケットベルが普及し始め外出していても連絡を取ることが可能となった。同時期に今では考えられない程の大きさと重さのバッテリーを搭載したショルダーフォンという無線電話が登場し、車載電話いわゆる自動車電話も見られるようになってきた。1990年代に入ると携帯型情報端末機器、いわゆる携帯電話も小型化が加速して行き普及が始まった。これらの技術革新は当時としては目を見張るものがあったが、いずれもアナログ通信における変革であった。しかしながら、2000年代に入り、デジタル通信技術革新の波が押し寄せ、パソコンの普及、携帯電話のデジタル化とさらなる小型化、テレビ放送のデジタル化とブラウン管を使用したものからLED等を使用した薄型テレビが瞬く間に普及することとなった。2010年頃からは、携帯電話が多機能化され持ち歩くパソコンとも言えるスマートフォンの普及が加速して行った。

それぞれの時代を背景とした電気通信技術の変革は我々の暮らしを便利に、そして豊かにしてきたことは間違いない。これらの技術を広く享受しさらなる発展を遂げることは重要なことである。ただし、この5年間、10年間の動向は、それ以前の時代とは大きく異なるものがあり、それは受動的受信から相互通信の時代に入り、その通信機器はいつでも我々の手の中に収まる時代になったということである。通信が、時間は関係なくいつでも、どこでも気軽に行える時代に入ったことが、我々のライフスタイルに様々な影響を及ぼしていると考えられる。また、中央調査社によると携帯電話を持っている20歳以上の人は8割を超えることが分かっている<sup>1)</sup>。

このような状況の中、学校教育においても、2008年に告示された小学校学習指導要領解説「総則編」によると、情報モラルの指導において、「コンピュータなどの情報機器の使用による健康のかかわりを理解すること」<sup>2)</sup>と記述されている。このことから情報モラル教育において健康維持の観点から指導を行うことが重要であると考えられる。

そこで、この研究では情報端末機器の大きな変革期に学生生活を送っている大学生、特に子ども達への健康教育や保健指導に携わろうとする養護教諭養成課程の学生に対して、その活用に関する利便性、課題、健康維持及び周囲の人々への配慮という観点から「情報モラル教育に関する調査」と題する意識調査を行うことにした。

## II. 調査方法

九州地区中堅都市に位置する養護教諭養成課程に在籍する、A女子短期大学の1年生の学生に対して情報端末の使用に関する意識調査を下の通り書面調査にて行った。1年生に対する調査は、昨今の情報端末の技術革新による新型機種が登場、通信事業者との契約内容並び

に各種サービスの動きが日進月歩であるため2014年7月（2014年4月入学生、94人）、2015年5月（2015年4月入学生、70人）と比較のため2年度にわたり書面調査を実施した。なお、これらの入学生の大学教室内での授業スタイルは2014年度は自由席、2015年度からは指定席となっている環境の違いがある。すべての質問に対する回答は任意（自由）で、得られる回答は統計的に処理され個人が特定されないよう配慮した。

## 1. 書面調査内容

注）本書で使用している「情報端末」というのは、文字、映像（画像）及び音声通信ができる携帯型情報通信機器を指すものとします。「情報モラル教育」とは情報社会で適正な活動を行うための基になる考え方と態度を意味するものとします。複数回答可としている所以外は1つ選択ください。その他→は自由記述です。

Q 1.あなたは養護教諭二種免許取得を希望していますか。

- 1.強く希望している
- 2.ある程度希望している
- 3.あまり希望していない
- 4.全く希望していない。

Q 2.あなたはどのタイプの末端を主として使用していますか。

- 1.スマートフォン
- 2.従来型携帯電話
- 3.情報端末は所持（使用）していない
- 4.その他→

Q 3.あなたは情報端末をどんな目的で使用（およそ毎日合計30分以上）していますか。該当するものすべてを選択ください。

- 1.音声通話
- 2.特定できる相手との文字による通信
- 3.不特定の相手との文字による通信
- 4.インターネット接続によるWebサイト閲覧（音声、動画を含むものを除く）
- 5.音楽聴取
- 6.動画視聴
- 7.ダウンロードしたファイルの閲覧（電子書籍を含む）
- 8.電子手帳としての入力又は閲覧
- 9.ゲーム
- 10.その他→

Q 4.あなたは情報端末の過度の使用で、ストレスを感じたり睡眠不足など生活のリズムを乱したことはありますか。

- 1.よくある
- 2.ある程度ある
- 3.あまりない
- 4.殆どない

Q 5.大学の中で、自分の周囲の人が操作する情報端末の影響で、ストレスを感じたり嫌な思いをしたことはありますか。

- 1.よくある
- 2.たまにある
- 3.あまりない
- 4.全くない

Q 6.大学の中で、周囲の人へ迷惑をかけないような配慮をしていますか。

- 1.よくそうしている
- 2.ある程度そうしている
- 3.あまりそうしていない
- 4.全くそうしていない

Q 7.街中で情報端末の使用を見かけた時、不適切とよく感じていることはどれですか。該当するものすべてを選んでください。

1.歩行中の使用 2.自転車乗車中の使用 3.車の運転中の使用 4.公共交通機関内での使用(優先席エリア) 5.公共交通機関内での使用(優先席エリア以外) 6.飲食店

7.その他→

Q 8.情報端末に関する子ども達へのモラル教育はどの世代で必要だと思いますか。該当するものすべてを選んでください。

1.大学 2.高等学校 3.中学校 4.小学校高学年 5.小学校中学年 6.小学校低学年  
7.幼児 8.いずれの世代でも必要ない

Q 9.大学において、情報端末に関する学生へのモラル教育は誰が行うと良いと思いますか。該当するものすべてを選んでください。

1.情報処理専門の教員 2.理系教員 3.文系教員 4.事務職員 5.管理職  
6.外部の情報教育専門家 7.その他→

Q 10.情報端末に関する高等学校以前の学校でのモラル教育は誰が行うと良いと思いますか。該当するものすべてを選んでください。

1.理系教科教諭 2.文系教科教諭 3.養護教諭 4.保健体育教諭 5.生徒指導教諭  
6.管理職 7.事務職員 8.外部の情報教育専門家 9.その他→

Q 11.情報端末に関する幼稚園や保育園(所)でのモラル教育は誰が行うと良いと思いますか。該当するものすべてを選んでください。

1.幼稚園教諭又は保育士 2.事務職員 3.管理職 4.外部の情報教育専門家  
5.その他→

Q 12.もしあなたが今情報モラル教育をしなければならない立場になったとしたら実践できる力量はありますか。

1.十分ある 2.ある程度ある 3.あまりない 4.全くない

Q 13.学校教育の中で実践する情報モラル教育の力量形成について、教員養成に関わる大学の教職課程に情報モラル教育に関する専門科目は必要だと思いますか。

1.強くそう思う 2.ある程度そう思う 3.あまりそう思わない 4.全くそう思わない

Q 14.現在の情報端末はあなたにとってどのような手段としての価値がありますか。該当するものすべてを選んでください。

1.コミュニケーション手段 2.学習手段 3.娯楽手段 4.スケジュール管理手段  
5.安全確保手段 6.その他→

Q 15.現在の情報端末技術水準の存在を仮定した場合、情報モラル教育を実施していないと仮定した時、情報端末の初めての所持をあなたが許容できると考える世代はどれですか。

1.大学 2.高等学校以上 3.中学校以上 4.小学校高学年以上 5.小学校中学年以上  
6.小学校低学年以上 7.幼児以上 8.いずれの世代でも許容できない

Q16.現在の情報端末技術水準の存在を仮定した場合、情報モラル教育を実施後に情報端末の初めての所持をあなたが許容できると考える世代はどれですか。

- 1.大学 2.高等学校以上 3.中学校以上 4.小学校高学年以上 5.小学校中学年以上  
6.小学校低学年以上 7.幼児以上 8.いずれの世代でも許容できない

### III. 調査結果

Q1～16書面調査に対する回答について表で人数と割合(%)を表中に示した。調査全例数(n)は、2014年度94例、2015年度70例である。選択肢の回答で無記入があった場合はその例数は外して集計を行った。選択肢のある質問の回答はその割合表示は全選択肢に対する回答割合を、複数回答可の質問の回答は全例数に対する回答割合をそれぞれ示した。

表1 Q1. あなたは養護教諭二種免許取得を希望していますか。

	2014年度 (n=94)	2015年度 (n=70)
1. 強く希望している	71人 (75.5%)	60人 (85.7%)
2. ある程度希望している	20人 (21.3%)	8人 (11.4%)
3. あまり希望していない	3人 (3.2%)	2人 (2.9%)
4. 全く希望していない。	0 (0.0%)	0人 (0.0%)

表2 Q2. どのタイプの端末を主として使用していますか。

	2014年度 (n=92)	2015年度 (n=70)
1. スマートフォン	92人 (100%)	70人 (100%)
2. 従来型携帯電話	0 (0.0%)	0 (0.0%)
3. 所持していない	0 (0.0%)	0 (0.0%)
4. その他	0 (0.0%)	0 (0.0%)

表3 Q3. 情報端末をどんな目的で使用していますか。

	2014年度 (n=94)	2015年度 (n=70)
1. 音声通話	42人 (44.7%)	36人 (51.4%)
2. 特定できる相手との文字による通信	72人 (76.6%)	62人 (88.6%)
3. 不特定の相手との文字による通信	15人 (16.0%)	9人 (12.9%)
4. インターネット接続によるwebサイト閲覧	62人 (66.0%)	56人 (80.0%)
5. 音楽聴取	53人 (56.4%)	44人 (62.9%)
6. 動画視聴	34人 (36.2%)	28人 (40.0%)
7. ダウンロードしたファイルの閲覧	13人 (13.8%)	9人 (12.9%)
8. 電子手帳としての入力又は閲覧	10人 (10.6%)	8人 (11.4%)
9. ゲーム	27人 (28.7%)	22人 (31.4%)
10. その他	0人 (0.0%)	1人 (1.4%)

表4 Q4. あなたは携帯端末の過度の使用で、ストレスを感じたり睡眠不足など生活リズムを乱したことがありますか。

	2014年度 (n=94)	2015年度 (n=70)
よくある	8人 (8.5%)	2人 (2.9%)
ある程度ある	31人 (33.0%)	25人 (35.7%)
あまりない	38人 (40.4%)	28人 (40.0%)
殆どない	17人 (18.1%)	15人 (21.4%)

表5 Q5. 大学の中で、自分の周囲の人が操作する情報端末の影響で、ストレスを感じたり嫌な思いをしたことがありますか。

	2014年度 (n=93)	2015年度 (n=70)
よくある	4人 (4.3%)	1人 (1.4%)
たまにある	18人 (19.4%)	12人 (17.1%)
あまりない	42人 (45.2%)	24人 (34.3%)
全くない	29人 (31.2%)	33人 (47.1%)

表6 Q6. 大学の中で、周囲の人へ迷惑をかけないような配慮をしていますか。

	2014年度 (n=94)	2015年度 (n=70)
よくそうしている	17人 (18.0%)	35人 (50%)
ある程度そうしている	69人 (73.4%)	30人 (42.9%)
あまりそうしてはいない	6人 (6.4%)	4人 (5.7%)
全くそうしてない	1人 (1.1%)	1人 (1.4%)

表7 Q7. 街中で情報端末の使用を見かけた時、不適切とよく感じていることはどれですか。該当するものすべてを選んでください。

	2014年度 (n=94)	2015年度 (n=70)
歩行中の使用	42人 (44.7%)	31人 (44.3%)
自転車乗車中の使用	52人 (55.3%)	54人 (77.1%)
車の運転中の使用	57人 (60.6%)	47人 (67.1%)
公共交通機関での使用 (優先席エリア)	40人 (42.6%)	30人 (42.9%)
公共交通機関での使用 (優先席エリア以外)	11人 (11.7%)	7人 (10.0%)
飲食店	7人 (7.4%)	1人 (1.4%)
その他	1人 (1.1%)	2人 (2.9%)

表8 Q8. 情報端末に関する子ども達へのモラル教育はどの世代で必要だと思いますか。  
該当するものすべてを選んでください。

	2014年度 (n=94)	2015年度 (n=70)
大学	25人 (26.6%)	23人 (32.9%)
高等学校	43人 (45.7%)	43人 (61.4%)
中学校	51人 (54.3%)	52人 (74.3%)
小学校高学年	52人 (55.3%)	38人 (54.3%)
小学校中学年	38人 (40.4%)	24人 (34.3%)
小学校低学年	18人 (19.1%)	9人 (12.9%)
幼児	2人 (2.1%)	0人 (0.0%)
いずれの世代でも必要ない	0人 (0.0%)	2人 (2.9%)

表9 Q9. 大学において、情報端末に関する学生へのモラル教育は誰が行うと良いと思いますか。該当するものすべてを選んでください。

	2014年度 (n=94)	2015年度 (n=70)
情報処理専門の教員	56人 (59.6%)	57人 (81.4%)
理系教員	9人 (9.6%)	5人 (7.1%)
文系教員	9人 (9.6%)	2人 (2.9%)
事務職員	6人 (6.4%)	0人 (0.0%)
管理職	12人 (12.8%)	6人 (8.6%)
外部の情報教育専門家	33人 (35.1%)	27人 (38.6%)
その他	4人 (4.3%)	0人 (0.0%)

表10 Q10. 情報端末に関する高等学校以前の学校でのモラル教育は誰が行うと良いと思いますか。該当するものすべてを選んでください。

	2014年度 (n=94)	2015年度 (n=70)
理系教科教諭	9人 (9.6%)	8人 (11.4%)
文系教科教諭	5人 (5.3%)	3人 (4.3%)
養護教諭	23人 (24.5%)	7人 (10.0%)
保健体育教諭	16人 (17.0%)	5人 (7.1%)
生徒指導教諭	46人 (48.9%)	36人 (51.4%)
管理職	7人 (7.4%)	6人 (8.6%)
事務職員	4人 (4.3%)	1人 (1.4%)
外部の情報教育専門家	80人 (85.1%)	37人 (52.9%)
その他	1人 (1.1%)	0人 (0.0%)

表11 Q11. 情報端末に関する幼稚園や保育園（所）でのモラル教育は誰が行うと良いと思いますか。該当するものすべてを選んでください。

	2014年度 (n=94)	2015年度 (n=70)
幼稚園教諭又は保育士	64人 (68.1%)	56人 (80.0%)
事務職員	14人 (14.9%)	3人 (4.3%)
管理職	6人 (6.4%)	3人 (4.3%)
外部の情報教育専門家	24人 (25.5%)	15人 (21.4%)
その他	3人 (3.2%)	1人 (1.4%)

表12 Q12. もしあなたが今情報モラル教育をしなければならない立場になったとしたら実践できる力量がありますか。

	2014年度 (n=94)	2015年度 (n=70)
十分ある	2人 (2.1%)	2人 (2.9%)
ある程度ある	20人 (21.3%)	11人 (15.7%)
あまりない	57人 (60.6%)	26人 (37.1%)
全くない	15人 (16.0%)	31人 (44.3%)

表13 Q13. 学校教育の中で実践する情報モラル教育の力量形成について、教員養成に関わる大学の教職課程に情報モラル教育に関する専門科目は必要だと思いますか。

	2014年度 (n=94)	2015年度 (n=70)
強くそう思う	11人 (11.7%)	6人 (8.6%)
ある程度そう思う	62人 (66.0%)	44人 (62.9%)
あまりそう思わない	20人 (21.3%)	20人 (21.3%)
全くそう思わない	1人 (1.1%)	0人 (0.0%)

表14 Q14. 現在の情報端末はあなたにとってどのような手段としての価値がありますか。該当するものすべてを選んでください。

	2014年度 (n=94)	2015年度 (n=70)
コミュニケーション手段	76人 (80.9%)	59人 (84.3%)
学習手段	39人 (41.5%)	25人 (35.7%)
娯楽手段	56人 (59.6%)	47人 (67.1%)
スケジュール管理手段	40人 (42.6%)	37人 (52.9%)
安全確保手段	26人 (27.7%)	18人 (25.7%)
その他	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)



表15 Q15. 現在の情報端末技術水準の存在を仮定した場合、情報モラル教育を実施していないと仮定した時、情報端末の初めての所持をあなたが許容できると考える世代はどれですか。

	2014年度 (n=94)	2015年度 (n=70)
大学	4人 (4.3%)	10人 (1.4%)
高等学校以上	36人 (30.3%)	24人 (29.2%)
中学年以上	32人 (34.0%)	36人 (51.4%)
小学校高学年以上	18人 (19.1%)	6人 (8.6%)
小学校中学年以上	3人 (3.2%)	1人 (1.4%)
小学校低学年以上	4人 (4.3%)	0人 (0.0%)
幼児以上	0人 (0.0%)	1人 (1.4%)
いずれの世代でもない	2人 (2.1%)	0人 (0.0%)

表16 Q16. 現在の情報端末技術水準の存在を仮定した場合、情報モラル教育を実施後に情報端末の初めての所持をあなたが許容できると考える世代はどれですか。

	2014年度 (n=94)	2015年度 (n=70)
大学	6人 (6.4%)	7人 (0.1%)
高等学校以上	28人 (29.8%)	23人 (32.9%)
中学校以上	40人 (42.6%)	35人 (50.0%)

#### IV. 考察

両年度共に、所属課程の特性から、殆どの学生は養護教諭免許取得を希望していた（表1）ことから、多くの学生は将来子ども達への心身の健康教育に携わる可能性が高いことを物語っている。2014年度無記入回答2例を除く全員がスマートフォンを所持していた（表2）ことから、スマートフォンが登場し本格普及を始めて5年程度であるため、これは驚異的な普及率、所持率と言える。両年度共に、1位が特定相手との文字通信、2位がWebサイト閲覧、3位が音声通話であった（表3）ことから、音声より文字や画像によるコミュニケーション手段、情報収集手段主流になっていることが分かった。また、総務省情報通信政策研究所の調査によれば、スマートフォン・フィーチャーフォンによるサービス毎のネット利用時間を男女別にみると、女子が「ソーシャルメディアを見る」が男子の約2倍であることに対し、男子が「オンラインゲームをする」のは、女子の約2倍であった<sup>3)</sup>。このことは、今回の書面調査の対象は女性だけであったため「ゲーム」使用の回答数が比較的少なかったことと一致している。睡眠への影響は、両年度共ある／ないが2分した（表3）が、植野らの研究によると、就寝前に携帯電話を利用する者は入眠時間が有意に長く、また入眠時間が長い程ぐっすり眠れなかったと評価する者が有意に多かった<sup>4)</sup>という結果が出ている。今回の調査結果でも生活リズムが乱れている学生が相当数いることは、非常に憂慮される事態である。使

用により入眠時刻が遅れ、眠れないから使用してしまい、スマートフォンの大きな画面による光の刺激という要因も加わり、悪循環となっている可能性がある。両年度共、周囲の学生の情報端末使用によるストレスは感じていないという回答が多かった(表4)。周囲へ迷惑をかけない配慮も多くの方がしているという回答したが、「よくそうしている」と回答したのは2014年度が18.0%に対して2015年度は50.0%へと大幅に上昇している(表5)。このことは、授業受講教室が2014年度に比べ2015年度は指定席が主流とする環境に変わったことで、周囲への配慮をする意識が向上したものと考えられる。街中使用の問題は両年度共、配慮をすべき公衆の面前や危険を伴う場面に憂慮を示した(表7)。子ども達への情報モラル教育の開始世代については、2014年度は小、中及び高等学校で半数前後であったが、2015年度は中、高等学校を回答する割合が多かった(表8)。これは、情報モラル問題が指摘される頻度と世の意識も上昇してきていることが反映したものと考えられる。しかし、それに先駆け2008年に学習指導要領も改訂が行われていたがその中では、「情報社会で適正な活動を行うための基になる考え方と態度」を「情報モラル」と定め、これを各教科の指導の中で身につけさせることとしている<sup>5)</sup>。また、両年度共、情報モラル教育のふさわしい指導者として大学では情報処理専門教員と外部情報処理専門家、高等学校以下の学校では生徒指導教諭と外部情報処理専門家を挙げた(表9、表10)。いずれも、内部だけでは指導不足として外部情報処理専門家の必要性を指摘したものと考えられる。一方、幼稚園や保育所での指導は両年度共に幼稚園教諭、保育士の指導の必要性を指摘していた(表11)が、これは幼児には身近な立場にいる人の方が安心感があると判断したと考えられる。自身の情報モラル教育の実践力は両年度とも不安を感じている(表6)ようであったが、その程度は2015年度の方が大きかった。これは、昨今の情報モラル問題の深刻度が影響を与えた可能性がある。

これらのことを反映してか、両年度共に大学の教員養成課程の中に情報モラル教育関係科目を盛り込むべきだと多くが指摘した(表7)。両年度共に、自らの生活にコミュニケーション手段、娯楽、スケジュール管理等で深く浸透していることが伺えた(表14)。情報モラル教育の実施の有無に関わらず、最初に子ども達に情報端末を持たせる世代は、両年度共に中、高等学校と回答していた(表15、表16)。また、「平成25年度青少年インターネット利用環境実態調査」の結果によると、携帯電話の所有率は小学生で36.6%、中学生で51.9%、高校生で97.2%となった<sup>6)</sup>。これは、情報モラル教育は子ども達に重要ではあるが、その有用性も無視できないと考え、今回の調査ではこの報告の数値とは連動しなかったと考えられる。

スマートフォンでのインターネット利用に関するモラル教育や指導のあり方については、いろんな箇所でも議論や啓蒙が盛んに行われている。ある都市の小学校の門前には「「ケータイモラルアップ ケータイ スマホ 夜10時電源OFF運動」という旗が掲げられている。実はこれは、小中学校の児童生徒の代表が「いじめゼロサミット2014」<sup>7)</sup>で、重点項目の一つとして「夜10時以降は、携帯電話やスマートフォンを使わないようにしよう」と話し合

って決めたもので、各学校で児童会や生徒会を中心に取り組んでいるとのことである。

また、2000年を前後界に携帯型のゲーム機器が異常な程のブームを巻き起こし、当時は夢中になる子どもへの悪影響について話題になっていた。その当時と今は何が違うのか。それは、インターネットへの常時接続環境ではなかろうか。2000年前後はネット社会の入り口であり、まだまだいつでもどこでもネット接続という環境は整っていなかった。そのため、携帯型ゲーム機器のエンターテインメント性はスタンドアロンの完結型であり、使用した挙句疲れきったら終了という感があった。しかしながら、今はゲームもその他の多様な通信もインターネットへ常時接続されている環境が完成している。そのため、そのエンターテインメント性はエンドレスになっており、当然子ども達のライフスタイルに大きな影響を及ぼしている。それが、エンターテインメントということで終始するならばまだ良いが、今は時として誹謗中傷の手段として使われることがあるなど様変わりしている場面を見聞きすることが多くなった。通信がエンドレスのためその影響も同様で終わりが無い。そのような場合、子ども達のメンタルヘルスへの悪影響も計り知れない。ネット依存、いじめ、不登校、長期欠席及び自殺に繋がっていくなど事は深刻である。ネット上に文句や悪口を書き込んだ経験がある中学生が14.6%に達しているという<sup>8)</sup>ことや「携帯電話に関わって、いじめや嫌がらせ等を受けた事案が57.5%（前年度47.4%）」<sup>9)</sup>と増加している傾向であることが分かった。また、スマートフォンの使用によりインターネットと携帯電話の境目が曖昧であること<sup>10)</sup>からネット依存も増加しているものと推測される。

通信は、かつては机に向かってパソコンを操作する時代から、手中に収まる携帯型に時代は様変わりしパソコンに引けを取らない性能を持ち合わせている情報端末機器が広く普及している。人と人をつなぐコミュニケーション手段、意思疎通のハードルが低くなり、24時間エンドレスに心の絆が容易に構築される時代は本来は歓迎されるべきなのかもしれない。情報端末機器で、商品を発注すると首都圏から遠くはなれた北海道や九州でも翌日に届けられるという時代にもなった。もっと近い距離であると当日配達も当たり前状況となっている。心も物も今や都心や田舎という概念は古く、どこにいても最先端、最新の情報、物流を手にする時代となった。スマートフォンという概念が思いも浮かばなかった20年前、30年前にここまでの時代になると予想していた人は殆どいなかったであろう。

昨今のスマートフォンを巡る様々な諸問題の議論は、その技術革新と普及が従前と比べ、かなりのハイスピードになっていることが背景にある。また、人間の特質として便利なものはすぐにそれに慣れてしまう、当たり前の存在という意識が芽生えることも要因と考えられる。街中を見ると、老若男女、殆どの人が携帯電話やスマートフォンを所持しており、電車のホームや車内を観察しても例えば電車7人座りの座席に座る7人の老若男女全てが小刻みに指を動かしながらスマートフォンを操作している風景を見ることも少なくない。山川らの報告でも電車で通学している学生のうち、スマートフォンを「よく使う」が58%、「使う」

が32%であったということ<sup>11)</sup>から、90%もの人が頻繁に操作をしているということが分かる。歩きスマホや自転車乗車スマホなどと称し、極めてリスクを伴う行為を目にするのも良くあり、実際に事故に繋がっているケースも急増している。5年頃前から爆発的普及を開始したスマートフォン、今その使い方、特に周囲の人への配慮や安全性について振り返ってみる必要性を強く感じる。

## V. 総括結論

世間の老若男女に普及している携帯電話やスマートフォンのモラル教育は若い世代から開始すべきで、誰かが指導というより若い世代に色んな場面での使用方法の是非に気づいてもらうことに重点を置いた方が効果的であると考えられる。是非に気がつけば、当事者同士で議論を深めお互いが守って行きたい、守っていくためのマナーの提言をできるようになってもらう環境作りが重要である。今回、養護教諭養成課程に所属する1年生に携帯型情報端末の使用に関する意識調査をしたが、自らや周囲の抱える課題や心身への影響に気づき、そのような意識をもって大学で教育保健学領域の学びが深まれば、将来健康アドバイザーとして大きく貢献できるものと考えられる。今回の調査結果から、情報端末機器の使用に埋没している感の漂う多くの学生において「このままではいけない、何とか早期の若い世代の教育を」という意識があることが確認できたことは救いであった。それは養護教諭養成課程で学ぶ学生の特質が現れたものと考えられる。

## VI. 謝辞

本調査に快くご協力して頂いたA女子短期大学に在籍する学生各位に深謝する。

## VII. 参考文献

- 1) 一般財団法人中央調査社、携帯電話に対する世論調査、(2011)
- 2) 文部科学省学習指導要領解説総則編、情報教育の充実、コンピュータ等や教材・教具の活用、第1章第4の2、9 (2008) 81
- 3) 総務省情報通信政策研究所、高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査報告書、(2014) 9
- 4) 植野香織、田中茉奈美、藤井千恵、就寝前のメディア利用が生体リズム及び睡眠の質に与える影響について、(2011) 53～58
- 5) 文部科学省「教育の情報化に関する手引」政策検討会 第5章情報モラル教育、教育の情報化に関する手引、(2009)
- 6) 内閣府、平成26年度青少年のインターネット利用環境実態調査結果(速報)、(2015)

- 7) 福岡市教育委員会、いじめゼロサミット開催、(2014)
- 8) 葉袋秀樹、情報モラル教育の充実に関する研究、山梨県総合教育センター、(2010) 1～16
- 9) 情報研究チーム、情報モラル教育に男関する研究 子どもたちの情報モラル・情報リテラシーの定着をめざして、福島県教育センター、(2014) 33～42
- 10) 青山郁子、高校生・大学生におけるインターネット・携帯電話依存、ネットいじめ経験とひきこもり親和性の関連、教育研究、56 (2014) 43～48
- 11) 山川由起子、赤岡仁之、スマートフォンの普及による若者の電車内行動の変化 OOHへの影響を考察する、武庫川女子大紀要、(2012) 115～122

## **The opinion poll about information morals education of school-nursing course students**

Yoshiaki MATSUMOTO, Yoko ISHADO

Advanced course of child care and education at Kyushu Women's Junior College  
1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

### **ABSTRACT**

The development of the telecommunications technology of these days includes a thing to stare wide-eyed at. As for the use of the mobile phone, a call was mainstream at first, but we became able to exchange a simple short sentence, and the connection to the portable Web site developed into the information appliance which walked, and tablet type communications equipment, smartphones spread in an instant from about 2010. We will hold the new problem including adverse effects to rhythm of the life by the overuse and the nuisance to neighboring people by flip of the convenience.

Therefore, in this study, we were for the maelstrom of the smartphone heyday and it lasted for the freshman who was more likely to be engaged in health education and the health guidance of children in the future in 2 and performed an attitude survey about the use.

As a result, the student who was more likely to be associated with health education and health guidance was found to strongly feel the need that educated appropriate information morals being conscious of the convenience, the need to possess, consideration to the circumference and effect on health from own put circumstances.

Keywords : mobile phone, education, information